



コロナ禍が続く今、本当に大事なことは何なのだろうかと考える機会が多くなりました。園行事についてもコロナ禍という制限がかかる中で、今までしてきたことを、必要最低限のことは何かを考えると、本当に大事にしたいことが鮮明に見えてくる。その繰り返しの毎日です。(園行事については、主任のページで少し触れていますので、ぜひ見てください)。



このコロナ禍になり、日々の懇談会や送迎時に聞いた保護者の呟きや発信から、気付かされたことがありました。保育園で働く中で職員が大切にしていることは、伝えてきたと思っていたけれど、保護者からしたら知らないことが多いという話を耳にして、あらためて考えると、私たちは知ってほしいと言いながら伝えているつもりになっていたことが沢山あるのではないかと気がきました。保護者はどんなことを知りたいのだろう？ そう考え出した頃に、つばさっ子“おやあやルーム”編集部の方が、職員についてもっと知りたいからアンケートを取って特集を組ませてほしいということで、5月～6月号のページで記載してくれました。つばさっ子5月号“おやあやルーム”のページ、楽しく拝見させていただきました。編集者のみなさん、素敵な企画をありがとうございました。良くも悪くも、私をはじめ不器用さが目立つつばさ職員ではありますが、こんな風に見えない部分にも光をあててもらえると、また違った印象をもってもらえるかもしれないと思うと嬉しい限りです。他にも保育園のことで知りたいことがあれば、ぜひ教えてください。

さて、巻頭のお題目について、お話ししたいと思います。保育はサービスなのか？ 私はこのことについて、ずいぶん長く自問自答してきました。

“保育サービス”という言葉は、社会的にもよく使われているので保護者も“保育はサービス”と思う方は多いのかもしれませんが。けれど長年、保育現場に携わってきた私は、どうしても保育はサービスとは思えないでいます。違和感を抱えたまま、保育園で働いているのですが、先日、その違和感から抜け出せそうな話をリモート公開討論会で聞くことができました。テーマは、「サービスの国から ～保育園はサービスか～」でした。

印象に残ったことは、「保護者からすれば保育園は、あくまでもお金を支払って、子どもを預ける場所と考える人は多いのではないかと。それは、多くの行政が保育園案内をするときに“保育サービス”という言葉を使い、そこには保育料の説明もあるのだから、保育園利用の入り口(入園時)はそういう感覚を保護者がもっていてもおかしくない」という話でした。なるほどなぁと聞いていた次の瞬間、「けれど、子どもにとっての保育園は、育つ場所である。」その言葉に大きく頷く自分が居ました。そうなのです。私は人が育つ場で働いてきました。サービスの一環で子どもと関わっているのではなく、子どもたち自身が、“自分が”を表現する時期を経て、自分以外の他者がいることに気付く。子ども世界はガチンコだから、ケンカすることも自分ではどうにもならない他者の世界があることを知るチャンスと捉えています。他者とのやり取りを通して、子ども自身がより自分を知り育て上げていく。子どもは本来、そんなたくましさをもっています。保育園は子ども自身が生涯の自分を支える根っこをつくる場所と考えているので、大人がすぐに答えを出すのではなく、見守る時間、気付く環境が必要で、それが保育園の役割であると思っています。だからこそ、親だけではなく多くの大人が一人ひとりの子どもを見る視点が必要で、それについて話す場を大事にしてきました。各家庭の環境は、我が子しか見えないことがほとんどだと思うので、子どもの世界を知っている保育士の役割は大きいと思っています。子どもが家で見せる顔、保育園で見せる顔は違っておかしくない。その見せる顔を話すことで、子どもの育ちを多面的にみて、考えることができる。そのために、日々の日報や懇談会の役割は重要です。職員の各部署会議もそのためにあると考えます。人が育つ場にはそういう視点が必要で、だから保育はサービスではない。“保育サービス”という言葉の違和感は消せない。そんな私の心境です。

保護者のみなさんはどう考えますか？

保育はサービスなんでしょうか？ 保育園の役割はどんなイメージをもっていますか？

現在つばさ世帯数は 76 世帯。父母を別にカウントするとその倍の保護者がいて、きっとそれぞれ考えは違うと思います。一度考えてみてください。

※公開討論会は、Web上で見ることができるので、興味がある方は、お声掛けください。



卒園児親子レクリエーション。在園中に子どもたちが植えたおいもをほりました